後期ウィトゲンシュタインに何を学ぶか

——事象から文法へ——

黒　崎　　宏

はじめに

「後期ウィトゲンシュタインに何を学ぶか？」というテーマを考えるとき，私にはいろいろな事が思い浮かぶ。哲学全般については「哲学の病は反省――後知恵――から起こる」という事が思い浮かぶ。（ウィトゲンシュタイン『哲学的探究』*Philosophische Untersuchungen*，略して『探究』，第175，176，305，316，428，436，547節その他を参照。）この所見は，「哲学の方法は反省（内省）である」とする，（例えば，ロック，カント，ブレンターノ等に見られる）よくある所見に対するアンチテーゼになっている[1]。行為については，「私は，根拠なしに，当（まさ）にそのように行為する」という事が思い浮かぶ。（『探究』第201，211，217，289，292節その他を参照。）私は，この所見こそ行為論の核心を突いているものである，と思う。

以下において私は，上のテーマを考えるとき，私に自然と思い浮かぶもう一つの事――しかも，後期ウィトゲンシュタインにおいて最も根源的であると思われる事――を，私なりに論じてみようと思う。それは，「事象から文法へ」という事である。

この結論に達するには，少なくとも，次の二つの事を明らかにしなくてはならない。

① 哲学で問題になる〈心的な事柄〉のうち，〈純粋な持続（echte Dauer）[2]〉を有しないもの――信念，知識，理解，記憶，等々――は，脳のような物的事象ではないのみならず，実は心的事象ですらない。

② 哲学で問題になる〈心的な事柄〉のうち，〈純粋な持続〉を有するもの——感覚や感情——も，脳のような物的事象ではないのみならず，やはり，実は心的事象ですらない。

私は，①については，すでに別のところで論じた事があるので[3]，ここでは主に②について，しかも，「実は心的事象ですらない」という事について，論じたい。そしてそのために，「必要な過剰」とうい概念を用いたいと思う。このパラドキシカルな概念なしには，後期ウィトゲンシュタインの「感覚論」や「感情論」は，すなわち，〈感覚〉や〈感情〉に係る言語ゲームについてのウィトゲンシュタインの記述は，理解出来ないであろう。したがって，ここでの私の議論の目的は，「必要な過剰」という概念を用いて，〈感覚〉や〈感情〉に係る言語ゲームを理解し，それを通じて，感覚や感情は「実は心的事象ですらない」という事を明らかにする事である。

この点が明らかになれば，「事象から文法へ」という事の深い意味について，一定の理解が得られるであろう。

I．「必要な過剰」

「存在する」「感じる」「知る」「思う」「信じる」「理解する」「考える」「推論する」「思い出す」「意志する」「意味する」「欲する」「行う」「生きる」「死ぬ」「真である」「善い」「美しい」「自由である」「必然的」「偶然的」「世界」「人間」「他人」「自分」「私」「心」「身体」「物質」……哲学で問題にされる事柄は実に多い。しかし，哲学で問題にされるのは，それら

で言われる〈事象〉ではなく，それらの〈概念〉である。(『探究』第383節)

〈事象〉は何であれ科学の対象であり，科学において，〈事象〉が従う法則が仮説，実験，観察などを通して探究される。そしてその際，そこで用いられる概念は，すでに明らかなものとして，前提されているのである。しかし哲学においては，〈概念〉そのものを明らかにする事が，求められるのである。

〈概念〉を明らかにする，という事は，〈語の使用〉を明らかにする，という事である。(『探究』第383節)　そして，〈語の使用〉を明らかにする，という事は，何はともあれ，〈語が使用される状況〉を明らかにする，という事なのである。

場面を感覚に限定し，その中で最も明確と思われる〈痛み〉を問題にすれば，〈語が使用される状況〉には，次の二つがある。

①外的な状況

②内的な状況

他人の痛みについて語るときは，彼の〈外的な状況〉に基づく。そしてこの〈外的な状況〉が，一般にウィトゲンシュタインのテクニカルタームで「規準 (Kriterium)」と言われるのである。しかしここでは，この〈外的な状況〉をあえて「外的規準」という事にする。(『探究』第580節を参照。)

これに対し，自分の痛みが表出されたり，自分の痛みを語ったりするときには，その底に〈内的な状況〉がある。この〈内的な状況〉は，一般には，「規準」とは言われない。(『探究』第290，377，378節を参照。) しかしここでは，この〈内的な状況〉をあえて「内的規準」と言うことにする(4)。

他人の〈痛み〉について語るときは，その人が置かれている「環境」とその人の「振る舞い」を一体にした意味での〈状況〉——これが〈外的な状況〉すなわち〈外的規準〉である——に基づく。しかし，その他人の痛みを感じることは出来ない。

自分の〈痛み〉が表出されたり，自分の〈痛み〉を語ったりするときには，その底に自分の感じる「痛みそのもの」と言われるもの——これが〈内的な状況〉すなわち〈内的規準〉である——がある。この場合には，私が置かれている「環境」や私自身の「振る舞い」は問題にならない。

しかし，私が「私は歯が痛い」と言うとき，他人は私について「彼は歯が痛いのだ」と言う事が出来るのでなくてはならない。また，私がある他人について「彼は歯が痛いのだ」と言うとき，彼は「私は歯が痛い」と言う事が出来るのでなくてはならない。したがって，〈内的規準〉と〈外的規準〉は，同時に満足されなくてはならないのである。私はこの事を，「〈内的規準〉と〈外的規準〉の一致」と言いたい。(『探究』第357節を参照。) しかしこれは，考えてみれば，当然なのである。なぜなら，「痛い」という語の使用は，外的規準に基づいて教え込まれるのであるから。

それ故，自分の痛みにしろ，他人の痛みにしろ，〈外的規準〉の一部である〈振る舞い〉を伴わない〈痛み〉は，痛みではないのである。もちろん，弱い〈痛み〉には振る舞いを伴わないことがある。しかしそのような弱い〈痛み〉は，振る舞いを伴わざるを得ない強い〈痛み〉をもとにして，〈痛み〉として理解されているのである。

さて，すでに述べたように，他人の〈痛み〉について語るときは，その人が置かれている〈外的な状況〉を規準にしている。しかし，その他人の痛みを感じることは出来ない。

しからば，その他人の痛みを想像することならば出来るのではないのか？　やはり，出来ないのである。感じることが出来ないものは，想像することも出来ないからである。ここで可能なことはただ一つ，その他人になり代わって，自分自身の痛みを想像すること，のみなのである。私はこれを，「感情移入（Einführung)」にならって「人格移入」と言うことにする。

これに対し，自分の〈痛み〉が表出されたり，自分の〈痛み〉を語ったりするときには，その底に自分の感じる「痛みそのもの」と言われるもの——〈内的規準〉——がある。しかしその〈自分の感じる「痛みそのもの」と言われるもの〉は，もちろん，他人には感じられない。その意味で，それは「私的」なのである[5]。ウィトゲンシュタインは，この〈私的なるもの〉を〈かぶと虫〉にたとえている。

ウィトゲンシュタインは『探究』の第293節において，言っている。

（ただし，波線〰〰および鉤括弧［ ］は黒崎によるものである。以下においても，同じである。）

人はみなある箱を持っている，としよう。その中には，我々が「かぶと虫」と呼ぶあるものが入っているのである。［しかし］誰も他人のその箱の中を覗くことは出来ない。そして，皆，彼［自身］のかぶと虫を見る事によってのみ，かぶと虫の何たるかを知るのだ，と言うのである。――ここにおいて，人はみなそれぞれの箱の中に異なった物を持っている，という事も可能であろう。否，それどころか，箱の中の物は絶え間なく［不規則に］変化している，という事すら想像可能であろう。――さてしかし，このような人々における「かぶと虫」という語が，それでもなお［彼らにおいて，きちんと有効に］使用されるとすれば，どうであろう？――そうであるとすれば，［「かぶと虫」という語の］その使用は，ある物の名前としての使用ではない。箱の中の物は，そもそも――あるものとしてすら――その言語ゲームには属さないのである：なぜなら，その箱は空っぽ (leer) ですらあり得るのであるから。――その言語ゲームは，箱の中の物を素通りする事によって，「短絡させられる」事が可能なのである；箱の中の物は，たとえそれが何であれ，なくされ得るのである。

すなわち，こうである：もし人が，感覚の表現の文法を「対象とその名前」というモデルに従って構成するならば，その対象は，無関係なものとして，［言語ゲームの］考察から抜け落ちる (herausfallen) のである。

これを要するに〈私的なるもの〉は，「私は痛い」と言うためには，必

要ではあるが，ある特定のものである必要はないのである。それは，絶え間なく不規則に変化していてもよいし，極端な場合としては，なくともよいのである。私はこの事を「必要な過剰」と言って表現したいと思う。「過剰」というのは，その〈私的なるもの〉は，当の言語ゲームには属さないのであるから，である。(『探究』第271節を参照。)

この「必要な過剰」という概念は分かり難いと思われるので，比較的わかり易い例で説明しておこう。

例えば，25^2 という計算は，一般には例えば，白い紙の上で黒い鉛筆で，あるいは，青い，もしくは，赤いボールペンで，しかもある形とある大きさで，書きながら計算される。この際，とにかく何色かで，しかもある形と大きさで，書く必要はあるが，しかしそれがその色であり，その形と大きさである必要はない。しかも，もし暗算で計算する仕方を知っていれば，極端な場合としては，書く必要もないのである。ただし，暗算が出来るようになるためには，それに先だって，とにかく何色かで，しかもある形と大きさで，沢山書きながら計算する事が必要であることは，言うまでもない。したがって私は，計算のそのような〈色・形・大きさ〉といった〈物的な側面〉を「必要な過剰」と言って表したいのである。計算の〈色・形・大きさ〉といったこの〈物的な側面〉は，計算には属さないのであるから，「過剰」なのである。しかしそれは，必要なのである。暗算にとってすら，必要なものとして，前提されているのである。しかもそれは，かぶと虫のように，変化してもよいのである。そしてその変化は不規則でもよいのである。(第207節を参照。)

話を本題に戻す。もちろんウィトゲンシュタインは，しばしばそう誤解されているのだが[6]，「私的」な感覚は存在しない，と言っているのではない。(『探究』第305－308節を参照。) 彼は，「もし人が，感覚の表現の文法を「対象とその名前」というモデルに従って構成するならば，その対象は，無関係なものとして［言語ゲームの］考察から抜け落ちる」と言っているのである。〈感覚〉は，〈感覚言語〉を用いる言語ゲームにおいて，不可欠な役割を演じている。しかしそれは，いわば〈必要な過剰〉なのである。この事をウィトゲンシュタインは，『探究』の第304節において，こうも言っている。

> 感覚は，あるもの (Etwas) ではない。しかしまた感覚は，ないもの (Nichts) でもないのである！ 結論はただ，ないものは，――それについては何も言えない――あるものと同じ働きをするのだ，という事であったのである。

以上は〈感覚〉について，であるが，同じ事が〈感情〉についても，言える[7]。これらに共通していることは，いずれも〈純粋な持続〉を有する，という事である。これに対し，〈純粋な持続〉を有しないものについては，事情が異なってくる。この点については，「意味する」という事を一例として，簡単に触れるだけにする。

ウィトゲンシュタインは，『探究』の第661節において，こう言っている。

> 私は，［その時私は］彼を意味していた，という事を覚えている。

［しからば］私は，［私における］ある過程あるいは状態を覚えているのか。［そうではない。］――［もしそうであるならば，］その過程あるいは状態は，いつ始まったのか；いかに経過したのか；等々［　，という事が問われ得る。しかし，このような問いには答えは存在しないのである］。

したがって，「意味する」という事は〈純粋な持続〉を有しないのである。たとえその時私に何等かの〈心的事象〉が生じていたとしても，〈その時私は彼を意味していた〉という事に対応する心的事象なるものは，存在しないのである。したがって，ここにおける〈心的事象〉は，〈必要な過剰〉ですらないのである。

Ⅱ．事象から文法へ

以上の教訓は何であろうか？

最もその存在が明確であると思われる〈痛み〉――どうしようもなく存在するあの嫌な〈痛み〉――でさえ，ある意味では厳然と存在しているにもかかわらず，「痛み」の言語ゲームには属さないのである。それは，〈必要な過剰〉として，言語ゲームの外に，存在するのみなのである。この事は，我々に意味ある存在として与えられているものは，〈痛み〉の言語ゲームであって，〈痛み〉そのものではない，という事を物語っている。我々にとって意味のある存在は，言語ゲームであって，〈痛み〉といった事象ではないのである。

したがって当然，〈哲学的探究〉――概念を明らかにする事――は，言語

ゲームにおける〈語の使用の探究〉であり，その意味での〈文法的探究〉なのであって，それ以外ではあり得ないのである。そしてこの〈文法的探究〉が，〈痛み〉の何たるかを教えてくれるのである。ウィトゲンシュタインは『探究』の第373節において，言っている。

> あるものがいかなる種類の対象であるか，という事は，文法が語っている。

ところが従来は，えてして，〈哲学的探究〉の名のもとに，〈事象の探究〉——特に心的事象の研究——が行われてきた。後期ウィトゲンシュタインが果たした事は，哲学的探究をそのような〈事象の探究〉から〈文法的探究〉へと，コペルニクス的に転換せしめた事なのである。

この事は，標語的に「事象から文法へ」と言うことが出来よう。そして『探究』の全体が，その事のための巨大な力業であったのだ，と思われるのである。『探究』では，その序文の冒頭でも述べられているように，意味，理解，命題，論理，意識の状態，等々，さまざまな概念が論じられている。しかし『探究』は，同時に，——この暗い時代の中で——いくつかの頭脳に光を投げ掛けるという事をも，企図していたのである。(『探究』序文末尾〕この「光」に「事象から文法へ」という〈コペルニクス的転換〉を読み込むのは，読み込み過ぎであろうか？

〔注〕

（1）ロックは，我々の観念はすべて経験に由来する，という彼の説の核心を述べた後，経験には二つの源泉――二つの「知識の泉」――があると言う。すなわち，こう言っているのである。

第一［の泉］は我々の感覚である。個々の対象には，それに関する感覚があり，そしてその感覚が，対象によって影響されるさまざまな仕方に従って，物に関する種々の明確な知覚を心にもたらすのである。かくして我々は，黄色い，白い，熱い，冷たい，柔らかい，堅い，苦い，甘い，および，我々が感覚し得る質と呼ぶもののすべてについて，観念を持つに至るのである。この偉大なる源泉……を私は感覚と呼ぶ。

第二の泉は――悟性が獲得した観念について悟性が用いられる時，我々の内部に生ずるところの――我々自身の心の働きに関する知覚であり，それによって経験は悟性に［新たな］観念を提供するのである。すなわち，我々自身の心の働きに関し，心が反省し考察するに至るとき，悟性には，外界の物からは得られない一群の観念が提供されるのである。その観念とは，知覚すること，考えること，疑うこと，信じること，推論すること，知ること，意志すること，および，我々自身の心のあらゆる異なった働き，についてのものである。……観念のこの源泉を人は全く自らの内に持っている。そしてこの源泉は，外的対象とは無関係であるので，感覚ではないとはいえ，しかしそれでも，感覚と非常に似ている。それゆえそれは，内部感覚（internal sense）と呼ばれてもよいであろう。しかし私は，他の源泉を感覚と読んでいるので，この源泉を反省と呼ぶことにする。というのは，この源泉が提供する観念はみな，心が自分の内にある自分の働きについて反省することによって得られるもの，であるからである。（John Locke, *An Essay concerning Human Understanding,* book II, ch. I, secs. 3–4）

ロックのこの見解はカントによって再現された。ロックが「感覚」と呼んだものを，カントは「外部感覚（der aüßere Sinn)」と呼んだ。またロックの「反省」は，ロック自身の言葉をまねて，カントにおいては「内部感覚（der innere Sinn)」となった。カントはこう言っている。

> それによって心性が自らを，あるいは自らの内部状態を，直観する内部感覚は……（Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft,* B37）

ブレンターノは，すべての「心的現象」が有する一般的特質を明らかにしようと企てた。彼は，『経験的立場からの心理学』において，あらゆる「心的事象」は，「ある対象への方向性」によって特徴づけられ，「自らの内にあるものを対象として含んでいる」と言っている。ブレンターノは，心的事象は「自らの内にある対象を指向的に含んでいる現象として定義され得る，と言っているのである。このブレンターノの見解は，十分よく知られている。ところがブレンターノには，それほどよくは注目されていない他の見解もあるのである。彼の主張によれば，あらゆる心的現象の一般的特質としては，さらに，「それらはただ内的意識においてのみ知覚される（nur in innerem Bewußtsein wahrgenommen werden)」という事があるのである。ブレンターノは，心的現象の知覚を「内的知覚（innere Wahrnehmung）」と呼び，かつ，それに加えて，いわゆる「外的知覚」は厳格に言えば全く知覚ではない，と言う。したがって彼によれば，心的事象のみが「本来の意味において知覚（Wahrnehmung）が可能な唯一のもの」なのである。（Franz Brentano, *Psychologie vom Empirischen Standpunkt,* edited by O. Kraus, two volumes, Felix Meiner, 1955 Vol. I book II, ch. 1. sec. 6）「心的現象」という語によってブレンターノは，思いだし，期待，判断，確信，疑い，欲求，意図，怒り，喜び，悲しみ，等々，を意味している。そしてブレンターノが主張するところによれば，人があるものを欲求し，あるいは期待する時はいつでも，

その人は彼自身の欲求とか期待について，内的知覚を有しているのである。(D. M. Armstrong and Norman Malcolm, *Consciousness and Causality—A Debate on Nature of Mind*—, Basil Blackwell, 1984, pp. 109–110, pp. 24–25；D. M. アームストロング・N. マルカム著，黒崎宏訳『意識と因果性——心の本性をめぐる論争——』産業図書（1986）196－198頁，42－44頁を参照。)

（2）ウィトゲンシュタイン『断片』(*Zettel*) 第45，46，47，81，82節を参照。なお，アームストロング・マルカム前掲書の145－150頁も参照。

（3）「後期ウィトゲンシュタインの核心——事象から文法へ——」工藤喜作・他編『哲学思索と現実の世界』創文社（1994）所収

（4）クリプキの言うassertability condition（言明可能性条件）は，この「内的規準」を含んでいる。Saul A. Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language—An Elementary Exposition*—, Basil Blackwell, 1982, p. 74, pp. 87–88；ソール A. クリプキ著，黒崎宏訳『ウィトゲンシュタインのパラドックス——規則・私的言語・他人の心——』産業図書（1983）144，145，171頁を参照。なお，〈自分の痛みを語る〉という事は，本来の意味での〈語る〉ではなく，〈表出〉の一種なのである。

（5）この「私的」は，ウィトゲンシュタインが『探究』で論じた感覚日記での感覚Eが「私的」であるという意味では，「私的」ではない。感覚日記での「私的」には，外的表出がないのである。(『探究』第258－261節を参照。)

（6）柄谷行人はこう言っている。「……ウィトゲンシュタインが，内的過程というものは存在しないんだとして唯我論を否定していくときには，……」柄谷行人『ダイアローグ（1984－1986）Ⅲ』第三文明社（1987）11頁。

（7）一般的に言って，〈感覚〉は必要な過剰なのである。そして同様に，〈感情〉も必要な過剰なのである。すなわち〈感覚〉も〈感情〉も，言語ゲームには属さないのである。それらはいずれも，言語ゲームの外にあるのである。ウィトゲンシュタインは，この事をこう言っている。

感情，等々を，言語ゲームについての見方――解釈――として見よ！（『探究』第656節）

以上は，1993年4月24日，哲学会のカント・アーベントで行った講演の原稿を，訂正加筆したものである。